農経しんぽう

2014年（平成26年）8月25日

今週の本

農薬と食の安全

農学博士・梅津憲治氏著

物刊 植協会 日本防疫

消費者の間では依然として農薬への不信が根強い。一方、農家はその安全性についての誤解への対応に苦慮している―こうした現状を受け、一般社団法人日本植物防疫協会は「農薬と食の安全・信頼～Q&Aから農薬と食の安全性を科学的に考える～」を発刊した。

著者は、こうした問題に関して講演や講義を行っている農学博士・梅津憲治氏（徳島大学客員教授）。ここで採用されている問い（Q）には、梅津氏が実際に講演会場で受けた質問が採用されている。

16ある各章は、最初に質問を載せ、それに回答する形で展開。

「なぜ農薬は『悪いもの』と思われるようになってしまったのですか」（第1章・農薬とは―）。「『農薬は毒性が強く危険なのでは？』―急性毒性の強い農薬を使って栽培された作物を食べても大丈夫ですか」（第2章・農薬に対する社会の認識）などである。

そして最後の16章は「もっと聞きたいQ&A」とし、「家の中や畜舎などで蚊、ハエ、ゴキブリなどの駆除に農薬を使っていますが、問題ないでしょうか」「農薬が原因で、アレルギーやアトピーが増えていると聞いて心配です」といった20の質問をあげて、それに答えている。

農薬悪者論は、高度成長期に用いられた有機塩素系の農薬が公害病や薬害を起こしたことから、そのイメージが引き続いているのだろうが、その後の農薬科学の進化で、農薬は環境中で容易に分解され、残留性の少ない、人畜への安全性の高いものとなっている。

農薬登録の仕組み、残留のリスクなど、知りたいことを的確に記し、農薬を正しく理解するための一冊である。

A5判、282ページ。本体価格2800円＋税（送料実費）。問い合わせは同協会支援事業部・高橋氏まで（☎03・5980・2183）。

Q＆A形式で農薬の安全性を解説している